

第5次ネパールボランティア 2017年5月8日～13日

オープニング・セレモニーと選挙戦のネパール訪問

一般社団法人 神戸国際支縁機構 会長 岩村義雄

8日(月) 関空を平澤久紀兄と離陸

早朝5時半に、平澤氏をハイエースで、迎えに行き、関空に村上裕隆代表が送ってくれました。

広州で乗り換え。激しい豪雨と雷のため飛行機内では常にシートベルト着用のサインが表示されていました。同日、深夜近くの23時半にカトマンズ空港に到着。外は激しい雨が降っています。二人は、だれもいなくなった空港のフロアでいつものように睡眠をとります。「ボランティア道」では、直通の航空便に乗り、ホテルに泊まったりすることはありません。海外被災地訪問には、いくつものトランジットで乗り換え、一番安い航空券で現地入りします。「ボランティア道」とボランティアの相違点については、2017年3月10日に、ラジオ関西で放送させていただきました。野外活動を主とする青少年団体は、水とトイレがあれば子どもたちを連れて行き、体験活動を楽しみます。一方、「ボランティア道」は水とトイレがない被災地などへ足を踏み入れます。

毎回逗留するダリットの居住地には、深夜零時を回っているのに、中止しました。最下層のダリット層は一般の人々から襲われないように、高さ2メートルあるブリキの塀で閉めているからです。ダリットの人々は気質が穏やかで、親切です。横浜事件の「路上で生活をしている人」たちへのおじん狩りを思い出します。1983年2月5日、横浜市寿(ことぶき)町の須藤泰造さん(60歳)が山下公園で中・高生(14～16歳)10人たちから殺された事件です。全身に暴行を受け、肋骨が4本も折られた上、公園のごみ箱に入れられ、引きずり回されました。「あいつは大型ごみだ。反社会的な存在だ」と。逮捕後、少年らは「なぜ逮捕されるのかわからない。ごみを処分した」と人を殺したという認識はありませんでした。子どもたちによる無抵抗の「路上で生活をしている人」たちへの襲撃事件はそれから後も後を絶ちません。

深夜カトマンズ空港にいたのは、二回目の同行者平澤久紀氏と二人だけです。猿が玄関口から侵入し、私たちの近くに餌を求めてか、近づきました。野生動物が都会での生活に順応できるようになるのは、自分たちの生息場所が狭められ、餌が得られなくなったせいでしょう。人間と同じようにお菓子類でも平気で食べるようになっていきます。エコロジー、つまり生態系が変わって来ています。神戸国際支縁機構が目指している「田・山・湾の復活」は人間と野生の生き物の共存です。最貧国のネパール、南太平洋のバヌアツ、シリアなどでも必要と気付かされます。日本では、緩衝帯と言われる「里山」がほとんどなくなってきたために、山で生活していたサル、シカ、クマなどが人間との境界線を越えて、平気で入り込んで来ています。薪や炭づくりのために、伐採をして人間が手入れをしていた里山がなくなり、野生動物はいきなり街に来るようになっていきます。森林開発も大きな要因です。建材としてよく売れるスギ、ヒノキばかりが植えられるようになりました。木の実をもつ広葉樹林が消えてしまったのです。国土の七分の一の森は人間の利益追求のために損なわれてしまいました。

野生動物が人間を襲うのは、元はと言えば、住み処、食べ物、環境を奪われたことが原因です。カトマンズのサルも人間のエゴに翻弄されているのかと自問しました。

空港では、いつものように、ネパール紙幣に交換、プリペイドのSIMを購入。

5月9日 選挙一色の街並み

朝6時半、カトマンズのハリ・マハラジャン氏(36歳)や数人に携帯で連絡をしました。ネパール人は早起きなので、早朝に電話しても失礼にはなりません。クラウドファンディングを通じて集まった82万円に、機構が18万円を添えて、100万円にして送金したお金が建設に有効に用いられているかどうか、胸をふくらませながら、ダラムサリイに向かいました。今年1月に訪問した時、子どもたちに歓迎された地域です。

当初の予定では、5月にダラムサリイの方が今回招かれたマナハリ・チルドレン・ホームより先にオープニング・セレモニーをする予定でした。ところが政治、行政の混乱の中で、ダラムサリイ・チルドレン・ホームの許可がおりなかったのです。賄がないとスムーズに申請が通らない体験をしたハリ・マハラジャンは日本に連絡してきました。そこで、名称を変えて、仕切り直して申請することを提案しました。ダラムサリイ・チルドレン・ホームという福祉部門が窓口になっているからです。今度は、NNC(Nepal Neighbor Circle)、「ネパール隣人サークル」という新しい名称で、福祉の色彩をトーンダウンして申請したところ受理され、承認されました。そのため約3ヵ月、着工がずれてしまったのです。



早朝から、20年ぶりに行われる県規模の選挙で、ネパール中いたるところ、立候補者のポスター、宣伝、政党のカラーで埋め尽くされている印象です。

地方選挙は三日後の日曜日14日に投票が行われます。283の地方自治体の市長、副市長、区長、区議会議員の座をめぐり、5万人近くが立候補しています。首都カトマンズ(Kathmandu)には878人の立候補者がいます。

大地震後、世界各地のドナー機関から救援金が届いていてもネパールの民は恩恵を享受していません。中央集権化した政府システムや、中央官僚の省庁利益に対する民衆の爆発は頂点に達した観があります。道路、上下水道、流通について脆弱な行政マネジメントによるため息をあちこちで耳にします。任期は5年にもかわらず、政治的混乱のために、20年間も地方選挙がなされてきませんでした。地方議員は存在していないため、中央政権は自分たちの遣わした官吏、つまり役人と、それぞれの地方の政党の有力者たちが、なあなあでとりつくろってきました。したがって、住民の声がぜんぜん届かない行政でした。ちょうど江戸時代に幕府の役人が地方の藩ににらみをきかせて、言いなりにさせる構図と似ています。

ネパールも日本と同じ小選挙区制です。小選挙区制は二大政党の場合有効ですが、一つの政党が強いと大きな政党にだけ有利になります。つまり、少数者はなかなか議席につながらないのです。少数派は常に少数派のままです。小選挙区制の下では投票しても死票になるだけで、政治的に代表となる可能性はないのです。日本で政治に無関心な人がいるのもやむを得ません。一方、

ネパールの今回の地方選挙で、熱狂した民がそれぞれの小さな政党を支持している光景には考えさせられました。決して、あきらめてはいけない情熱です。バクトプールでは83%の投票率です。

『Himalayan Times』(2017年5月15日付)

過半数には遠く及ばなかったとはいえ、ネパール共産党マオイストは220議席(比例100)で第一党になりました。パンガヤ、ダラムサリィでよく見かけたネパール共産党統一マルクス・レーニン主義は103議席獲得し、第2位のネパール कांग्रेस党の110議席に続いています。

マオイストはネパールの既成の政治政党と違います。大都会カトマンズからではなく「農村から都市へ」、人民の味方という毛沢東主義理論を振りかざして成長してきました。貧しい農村を基盤に、国政にどのように影響を与えるか正念場です。貧しい者に寄り添う神戸国際支縁機構と共通の働きがあります。

とりわけネパールで、貧困者、人権を無視された層、異教徒に対して、積極的な働きかけをしようとするダラムサリィのNNC(Nepal Neighbor Circle ネパール隣人サークル)の中心になるハリ&サラワティ・マハラジャン夫婦のヴィジョン、行動、活動に期待しています。夫婦はそれぞれ支持政党が異なります。夫はネパール共産党統一マルクス・レーニン主義、妻はネパール共産党マオイストです。政治の話になると普段仲の良い二人も一歩も相手に譲歩しないと笑いながら話してくれました。現在、ネパール政府は政策実行が麻痺しています。ひとつにある政党による猛反対が起こると、足枷手枷で実現に至らないのです。ハリ・マハラジャン夫婦はそれぞれ異なる政党を支持していますが、ネパールをよくする上では協調できると言います。つまり、全政党制メカニズム(All Party Mechanism)です。自分たちの言い分だけを主張するのではなく、他の政党の意見も取り入れる寛容さです。決して、思想のため非寛容になるということはありません。

宗教も同じです。独善的に、ヒンドゥー教だけがよくて、イスラーム教、キリスト教、仏教に排他的な政党もあります。非寛容な政党が今回も立候補していましたが、多数派にならなくて良かったです。米国のように排他的なトランプ政権が反面教師になり、フランス、韓国、ドイツなどで、健全な選択がなされたことは、ネパールにも見られます。

ちなみに、奥さまのサラワティの父Dhan Lal Maharjanはマオイストを代表するひとりであり、40年間、大学で会計学を教えていたインテリです。お会いしましたが、政治家臭さもなく、扇情的に民衆をたきつけるタイプの候補者ではありません。信念をたんと貫く人柄が人気のある理由ではないかと印象に残ります。今回の選挙でタルケスウオール市長に選ばれました。私たちの孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者に対する働きにも理解を示していただけだったので、握手をしました。

入所予定の孤児たちとも再会しました。第1回目に傾聴ボランティアをした際、地震で孫を失った方、妻、子どもを亡くして悲嘆した方たちも再訪問しました。悲嘆とは、喪失した対象のない現実と生涯向き合い続けるプロセスが継続します。ですから、再会するだけで、お互いに黙っていても通じる関係があります。抱擁して慰め合います。

妹をなくした兄アニス(15歳)は、当初、暗い顔をしており、ぜんぜん笑顔がありませんでした。今年の1月もまだ家の下敷きになった妹のことがトラウマになっているせいか、私たち一行と出会ってもあいさつもできませんでした。今回は、昼食に招いてくれました。そこで明日のマナハリ行きに同行することになります。選挙のため、学校、職場は休日になっています。

5月10日(水) MCH(マナハリ・チルドレン・ホーム)のオープニング・セレモニー

早朝、5時半、私たち一行を乗せて、マナハリに向かう四輪駆動の車で出発しました。ハリ・マハラジャンとマナハリのアデッシュ・スイングとは面識がありません。4月に施設は完成していました。隣接の食堂はまだですが、トイレもできています。

昨年、村田義人(第61次,第2,3次ネパール)君や、植地亮太(第42次,丹波水害,第2次ネパール)君,谷口浩平(第61次,第3次ネパール)君たちが訪問し、日本からの惜しみない支縁を築いた場所です。

ドライバー以外に、5人が道中を共にします。悪路を走ります。普通の乗用車ならば、ぬかるんだところで立ち往生してしまいます。すると長い列ができます。時候は一年で最も暑い月です。古い中古車ならばエアコンが効いておらず、蒸し風呂のようになります。道路整備がお粗末なことからも、政治が機能していないことを思わせられます。すれ違う車はインド製のタタがトラック、バス、乗用車で圧倒的に多いです。ネパール政府は日本からの中古車輸入を禁じています。バヌアツやベトナムと違います。とりわけ日本の中古車は人気があり、長持ちしますから、ネパール国内が中古車で占められてしまうことを避けるため、海外からは新車しか輸入できない法を作りました。ちなみにインド製のタタや、韓国製が増えているのは、家電と同じです。技術にあぐらをかいて、開発国の低所得者層を相手にせず、金持ちの視点でビジネスを追い求めているといつしか取り残されてしまいます。庶民の味方になる視座が日本メーカーには欠けています。儲けばかり追求していると足元をすくわれてしまうのです。

片道約6時間ゆられます。あの屈強と思えるハリ・マハラジャンも、アニーシャも酔いました。窓からもどしています。

切り立った峻巖な山、峠、谷を越えます。車窓から見る光景はがらっと変わります。5時間後に、ヘドウダという都市に入るとカトマンズと同じように喧騒です。日本なら地方へ行くと、シャッター通り化しています。一方、ネパールの場合、どんなに僻地のようなところに足を伸ばしても、シャッター通りはありません。ひとつに人口、そのうち子どもが多いのです。そこからは平地を通過します。のどかな田園風景になります。茅葺きの屋根の家もありました。牛、やぎ、あひるなどが目に入ります。

午前11時12分に、現地に着きました。道中、あとどれくらいで到着するのかと、何度も問い合わせが入りました。皆さん待ち構えていました。地元の方たちもうれしそうな表情です。マナハリで最初の孤児の施設MCH(Manahari Children Home)マナハリ・チルドレン・ホームの開所式のため、晴れがましい空気が充満しています。青年たち、民族衣装で着飾った女性たち、子どもたちがホームの近辺でにぎわっています。今か今かとオープニング・セレモニーを待っておられました。

午後2時、50人ほどが集まったホームで、プログラムはアデッシュ・スイング師(36歳)が進行を務めました。若者たちの男性だけで合唱し、ホームを祝福します。マナハリのキリスト教会の牧師が奉獻の祈りを捧げます。つづいて日本からの支縁によって建造されたことを司会者は述べ、筆者を紹介します。祝辞を述べることになり、英語で語ります。「皮膚の色、国籍、宗教の壁を越えて、孤児のために日本とネパールの協力関係ができたことを感謝します」と。続いて開所を宣言しました。皆さんから大きな拍手をいただくと、地元の応答として、日本からの二人にネパールのスカーフを首にまとうてくださいました。日本からは、金斗絃画伯の5枚の絵、菅原洸人画

伯の絵がホームに贈呈できましたことはネパールの人たちにとって大きな喜びとなりました。

プログラムの最高潮は、4月下旬からホームに居住している5人の孤児たちが前に整列したときです。

両親がおらず、家もなかった子どもにとり、マナハリ・チルドレン・ホームはかけがえのない存在場所になりました。「ぼくはここが大好きです」とアンジット・ラマ君(6歳)は満面の笑みを浮かべていました。

平澤久紀氏は、泣くまいとがんばっておられましたが、頬に伝わる涙を禁じえなかったようです。

子どもたちは新しいホームが自分たちのものだという感激をまだ実感していないのか、別の部屋から隣の部屋へと何回も入ったり出たりしていました。菅原よ志子夫人から贈呈された絵が寝泊まりする壁にすぐにとりつけられたので、子どもたちも何度もくいいるように眺めています。ハリ・マハラジャンはたいへん刺激を受けたようで、行政のいやがらせで献堂が遅れているダラムサリィの孤児のホーム完成に向けて、「ぜひダラムサリィのオープニング・セレモニーにもみなさん来て欲しい」と宣伝していました。金斗絃画伯の絵をダラムサリィのNNC(Nepal Neighbor Circle)にも欲しいと願っていました。

来会者には、女性たちが腕によりをかけた盛大なごちそうがふるまわれました。何度もおかわりをすすめられ、若者たちも動けなくなるほど食べました。それでなくてもネパールの人はよく食べます。ごはんはどんぶり三杯分を一回でたいらげます。大きなお皿の上でライスとダルスープや野菜などを右手でかきまぜます。それが咀嚼です。つまり手で食感を味わい、噛むような具合です。口に放り込んだらすぐに飲み込みます。ですから歯でかむことはしません。年配の方でも、よく召し上がります。平澤兄もよく食べる方ですが、ネパール人には負けると脱帽されていました。

マナハリとダラムサリィが姉妹団体として協力するきっかけにもなりました。アデッシュはキリスト教会牧師、ハリ・マハラジャンはヒンドゥー教と宗教が異なっても、同じ年齢です。意気投合し、ネパールの将来のために力を合わせて変革していこうと固い握手をします。出会いが人生を変えるのです。孤児など人権が軽んじられていることに、心を痛めていた二人です。それぞれの地域で期待されているリーダーたちが手をつなげば、ネパールの将来も変わるでしょう。

帰路、家族同然にもなったアデッシュ夫妻から泊まっていくようにと言われました。翌日、パンガに行く約束をしているので、別れを告げます。帰路、アデッシュ師から、「本日は感動しました。人生最高の日でした」と3度も携帯に入りました。

帰途、二人はまた車に酔ってしまいました。せつかくのごちそうを全部、もどしてしまいかわいそうでした。

深夜にもかかわらず、ハリ・マハラジャンの家に泊めてもらうことになります。

5月11日(木) パンガ

ジャナク・ラル・マハルジャン Janak Lal Maharjan や、ビゴッシュ・マハルジャンたちと再訪問を約束しています。パンガはダラムサリィと同様、大震災により集落全体が壊滅的なダメージを受けました。おそらくネパールで最も早く、自発的に若者たちが復興のためにたちあがった地域です。被災した4日目にCDMC(Community Disaster Management Committee コミュニティ

災害対策協議会)は発足しました。ジャナクは事務局長として、若者たちを組織して、行政に依存せずに仮設の住宅、学校、幼稚園などを作りました。日本からは救援金がぜんぜんどこにも届いていない中で、神戸国際支縁機構は支縁してきました。ただし機構は孤児を中心とした活動のため、パンガには孤児の数が少なく、天涯孤独になってしまった子どもがいないので、孤児の施設を作る計画が実現に至っていません。

2015年5月14日に被災者を訪問した際、「死」の反対は「命」ではなく、「よみがえり」と通訳してもらったら、どういうわけか、村中に、死者をよみがえらせる日本人が来ているといううわさが広がりました。そんな中で、圧死寸前で助かった負傷者のところへ案内されました。その内のひとり夫を亡くしたドゥルガ Durga さん(72歳)に再会します。当時は骨折のため歩けず、泣き崩れていました。それ以来、ネパール訪問の度に必ず、立ち寄っています。学生たちだけで訪問するときも、同じような境遇のチョリさんたちに日本にいる時から、ジャナクに連絡をとってもらっておきます。今回は、ハンディキャップのある方の家に行きました。精神状態が安定しておらず、かつては凶暴だった方が足を切断してしまいました。

ティッカさんの家に行く途中で、ちょうどパンガに着いた日本人女性に出会います。今年の1月に、ネパールで出会った唯一の日本人です。伊藤さなえさんという京都大学の博士課程で研究のためパンガのCDMC (Community Disaster Management Committee コミュニティ災害対策協議会)に支縁している方です。なぜ日本人に出会わないかは、機構が訪問するのはダリット層、孤児、被災者など弱者がほとんどのため、観光地などに足を延ばさないせいです。伊藤さんは貯金すべてを寄附したり、日本に帰ってから知人達にパンガの窮状を伝えて、仮設住宅建設資金を提供しておられました。砂漠で水を発見したようなさわやかな思いになりました。CDMCの寄附者リストにも載せるのを控えておられたため、日本からの寄附はないと思込んでいました。日本人でこんな奇抜な方がおられるんだとわかった時、思わず涙が出ました。1月も今回もお互いに、わずかな滞在時間に巡り会え、ジャナクと協力しておられたパートナーであることがわかり、不思議でした。

ジャナクもアデッシュ、ハリと3人とも36歳です。3人はそれぞれ出会ったことがない関係でしたが、孤児のために立ち上がり、協力関係ができるならば、ネパールの将来にとって明るい材料です。

パンガでは救援金を孤児の施設ではなく、クリニックにしてほしいという協議になりました。建設費は孤児のためのものなら100万円ですみます。クリニックになると1000万円です。10か所も作ることが可能な金額です。ネパールは平均寿命が低いのです。出生時平均余命は地形区別では山岳部49.8年、丘陵部65.1年、平野部62.4年です。地方へ行くと、60代の人ほとんどいません。50代でお年寄り扱いです。安土桃山時代にタイムマシンで戻ったかのようです。なぜ寿命が短いのかの理由は、衛生状態が悪く、医療費が高く、貧しい人達は病院に行くことさえできないからです。病院の数も少ないのです。

パンガ地区にクリニックを作るとのことなど神戸国際支縁機構は引き受けられません。5月18日の理事会に報告はするものの、期待をしないようにと釘をさします。

夕刻、パンガからカトマンズの有力者のひとりジャカミ氏を訪問するため、約40分タクシーに乗ります。ジャカミ氏にクリニックについて相談します。ジャカミ氏は建築の経験も豊富であり、政財界に知人も多く、何かヒントを得られればと話しました。病院、クリニック建造は法外な価

格です。ネパールの小規模なクリック建造費が1千万円というのは現地価格では1億円規模になります。事業家でないとできない懸案事項です。

バガワティ夫人の姉はパンガにいるものしばかり会っていないという話になりました。話しているうちに、今日パンガで訪問した家がバガワティさんの姉の家であること、その姉の孫ヨージュ(14歳)がハンディキャップであり、昨年なくなったことなどの話題になり、驚きます。なぜならヨージュとは2015年の傾聴ボランティア以降、訪ねていた少年のことだったからです。車いす生活のため、通学もしないにもかかわらずほがらかな天真爛漫な子どもでした。立ち寄るのが楽しみだったのです。妻カヨ子の自宅療養のため、昨年はネパール、バヌアツなどの訪問を控えたため、葬儀にも出席できませんでした。昼パンガにいる時、ジャンクにヨージュを訪問したいと尋ねてわかった次第です。訃報を聞くと、目頭が熱くなり、号泣してしまいました。ヨージュの祖母がバガワティの姉パルバティだとは知りませんでした。衝撃はパルバティ夫人が夫と住んでいるところに招き入れられた家でした。全壊ではなく、とても人が住むに似つかわしくない在宅被災です。4階から5階にあがる階段も今にも折れてしまうのではないかとはいはごのような木材、それも廃棄処分の朽ち木のようなものです。体重をかけずにそろりと登ります。家具らしきものはありません。太陽から遮断された薄気味悪い部屋に息をひそめて生活をされています。行くところがないのです。かつて裕福であり、多くの土地をもっていたそうですが、今はどん底の生活です。希望のひとかけらもありません。ご主人も高齢で仕事は工芸品づくりだそうですが、さっぱり売れないと言われていました。ひときわ目立つのが4,5歳の孫の写真でした。ご夫婦は寂しそうに昨年なくなったとつぶやかれました。その写真の子どもこそ筆者が訪問していた14歳のヨージュだとバガワティさんから聞かされた時、なんと世間は狭く、人との縁は妙なものとしばらく口がきけませんでした。

バガワティさん夫婦の逆境を妹のバガワティさんに伝えます。急遽、姉を翌日訪問してみようということになります。ジャカミ氏はパンガで義理の姉を訪問してくれたこと、ヨージュと知り合いだったことを聞いて、目が潤んでいました。その夜はダリットのところで宿泊する予定でしたが、泊まっていくようにしきりにすすめられました。翌日、「岩村記念病院」を訪問するというと、長男のニラージ氏が休日なので自分の車で連れて行ってくれるということになりました。

5月12日(金) バクタプルの岩村記念病院

カトマンズから東へ15キロのバクタプル(Bhaktapur)に向かいます。ここも被災で世界遺産が大きなダメージを受けました。

岩村記念病院について、日本の「クリスチャントゥデイ」では2016年3月に官警によって岩村邸は破壊され、養子の子どもたちも血だらけになったとの記事がありました。ランジット・マリクフー病院長と10時半に面談します。岩村昇[1927-2005]氏は1993年にネパールの無医村での医療活動や各国青年の農業支援した功績でアジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受けました。1962年から18年以上もネパールにおいて貧しい人達からは医療費を取らなかったことが、今でも岩村記念病院に引き継がれています。

2年前の被災によりCT検査機や、MRA検査機が旧式であり、使用できなくなっています。CTにしても1500万円+送料+関税がかかります。今後、病院が維持できるように、日本からの寄附を機構に依頼されてしまいます。

ランジット院長は、病院内すべてと岩村邸を案内されました。岩村昇の養子たちが不運にも暴力をふるわれ追い出されたことなど、事件の顛末を話されました。決して、日本のメディアで言われているようにキリスト教に反対する口実で警察が乱入したのではないことなど一連の経緯についても苦渋に満ちた顔で話してくださいました。

病院は岩村昇先生の精神を継承し、医療費が払えない貧しい人達のために運営をしており、岩村昇医師が無医村の山間部で仕えたように、病院がない辺境地にクリニックを作るヴィジョンがあることを話されました。資金がなく、実現に至らないので、機構の力を借りたいと嘆願されました。

昨日のパンガに続いて、規模の大きい支縁を弱小の機構に願い出られたとしても、限界を超えています。日本国内における東北ボランティアですら、毎月交通費の赤字をくぐり抜ける青息吐息であることを説明します。そんな赤字でも、自分の利益のために働いていない機構だから、信頼してお願いできるのだとたたみこまれます。

神さまはこれ以上、機構に重荷を与えないでくださいと心の中で祈ります。同姓だからと言って、岩村記念病院は、機構の働きの外だからです。

誰もが飲み水、仕事、そして教育について心配しています。共産党系であるマオイストが強いのも身近な民の要求に応えているからです。確かに、政府、行政がする水源のための開発、失業者への職の斡旋、教育費の無料化などは民に安寧をもたらすでしょう。しかし、寿命に関係するばかりか、人の生涯で喜びをもって生きていくために必要な健康に機構はどれだけ貢献できるか挑戦を受けました。機構は東北ボランティア、熊本ボランティア、丹波水害、炊き出し、「田・山・湾の復活」など取り組んできました。

世界保健機関（WHO）憲章は、1948年、「健康とは、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態」と3つの条件を定義しました。つまり「肉体 physical」「精神 mental」「社会福祉 social well-being」です。しかし、1999年に健康の新たな定義として、肉体的・精神的・社会的だけでなく、「霊的 spiritual」も良好であることを加えました。政教分離が過度に行きすぎた「官」では、スピリチュアリティについて拒絶してきた経緯があります。タブー視してきた日本の厚生省や学会は「スピリチュアル(spiritual)」の適切な訳語も定まらないありさまです。

これからも機構は魂の健康に励むため、ボランティア道を貫き、被災者に寄り添っていきます。そうした働きを継続して行くうちに、孤児のための施設の建設基金が備えられたように、クリニックなどを建造する資金も与えられると信じます。

以上